

東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 75

Contents

- 2 東京大学文書館歴史資料部門への
着任にあたって

立花 孝裕

- 4 地震研究所100周年と文書館資料
加納 靖之

- 6 業務日誌（抄）
（2025年2月～2025年7月）

- 7 資料の公開について

- 8 文書館Topics
電子記録保存体制づくりに向けて
意見交換を行いました

元ナミ

健康と医学の博物館
「精神医学治療体制の確立を
目指して」

（2025年5月～10月）



当館所蔵資料を使って医学に関する
テーマで展示を行っています。
ぜひお越しください。



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

東京大学白金学寮（1953～2010）と女子学生たち



1956年頃、雪の降り積もった白金学寮で撮影された集合写真（F0223/S01/0394）

1953年9月、女子専用の
学生寮として港区白金三光
町に開設された東京大学白
金学寮は、2010年9月の閉
寮まで運営されました。

寮に残されていた歴史資
料は東京大学文書館に寄
贈され、2025年8月に新規
公開されました。



1997年に撮影された寮の玄関（F0223/S01/0360）

東京大学文書館歴史資料部門への着任にあたって

東京大学文書館 助教 立花 孝裕

いまだ「コロナ禍」の続いていた2022年6月、私は初めて東京大学文書館柏分館に足を踏み入れた。戦前・戦中の文部行政への関心から、「小松行松関係資料」(F0007)を閲覧しに行ったのだった。三方を山に囲まれた京都市を拠点に研究を続け、前日まで人とビルの密集した都心で史料調査をおこなっていた私は、青空のもと、緑と五六郎池の広がる柏キャンパスの開放感に触れ、胸のすく思いがしたことを覚えている。しかしながら、まさか自分がスタッフとしてここに通うことになるうとは思ってもみなかった。

着任から早4か月。東京大学文書館を「当館」と呼ぶことにも慣れた。この小文では当館への新任挨拶に代えて、これまでの私と大学アーカイブズとのかかわりと、着任にあたっての所感について記してみたい。

私は日本近現代史の立場から、制度としての学問の歴史に関心を持ち、戦間期から戦時期の帝国大学を対象として研究を進めてきた。日本史に興味があるという程度の理由で文学部に入学したが、自分が何を研究したいのかはよくわからなかった。そうしたなか、大学や学問をめぐる同時代のさまざまな議論に触れるうちに、人文学という一見高踏的に見える営みが、ポストや研究費といった制度的枠組みに支えられることで、世俗の

論理に少なからず影響を受けてきたことを認識するようになった。そのことに興味深さを感じていたことも、こういった研究を始めた背景にあったのだと思う。

そうした関心にも導かれながら、私は帝国大学の予算・人事や、今日で言うところのアウトリーチ的な活動について論文をしたためた。そんな私が、幸運にも当館に職を得たことではるばる関東へと居を移し、新たな環境からさまざまな知的刺激を受け、そして現在、一般向けの資料展示の企画に頭を抱えている様には不思議な心地を覚えるのだが、こうした経験を積み重ねることによって、一介の大学院生なら大して気にとめなかったはずの史料上の文言に、新たな角度から光を当てることができるようになるのだろう。あるいは逆に、私の日々残している業務の記録がいつか、2020年代の大学や大学アーカイブズを研究する（物好きな？）人びとの研究材料になるのだろうか、などと想像してみたりもする。

ともあれ、私は帝国大学の歴史について研究を進めるようになっていたが、その過程では当館をはじめ、各地の大学アーカイブズにたいへんお世話になった。むしろ大学の公的資料を抜きにして、私に関心を持つ研究活動の制度的基盤や大学の内部構造について研究することなど、できるはずがなかった。なかでも学生時代を過ごした出身校の大学文書館は、何度も足を運ぶうちに、閲覧室がいつしか第二の研究室であるかのように思うほど、安心感を抱く空間となっていた。

研究を始めた当初は、こういった資料が作成され、どのように編綴されているのかも分からなかったが、気になった簿冊をとりあえず請求して、その中身を一枚一枚めくり続けることで、次第にそれぞれの簿冊の内容や特徴を理解するようになった。そして、評議会議事録末尾に「会終了後、総長より左の如く報告ありたり」などとあるときには重要な記述が続くことが多いとか、評議会議事録には具体的な記述がなくとも、教授会議事録には踏み込んだ補足説明がある（あるいは関連する添付資料が綴じられている）場合があるとか、



当館柏分館の所在する総合研究棟6階からの眺望
(2022年6月2日撮影)

そういった研究上の肌感覚が身体に叩き込まれていったように思う。また、研究が行き詰まったときには、文書館が所蔵する大量の資料を目にして、「これだけ資料があるなら、もうちょっと頑張ってみるか」と思い直し、少し前向きな気持ちを取り戻す。そんな効用も、私は文書館に見出していた。

つまるところ私にとって大学アーカイブズはただの調査先ではなく、研究者として成長させていただいた場所だったのだと、今さらながら感じられる。その恩返しをしたい、などというのはいかにも優等生的な「模範解答」で白々しいし、そんなことを口にできるほどの実力もない。歴史学の知見とアーキビストの職務とが直結するわけでもない。しかし大学文書館でこれまで培ってきた知識やスキルが、当館やその利用者の方々になにがしか役立つのであれば、これに勝る喜びはないと思っている。

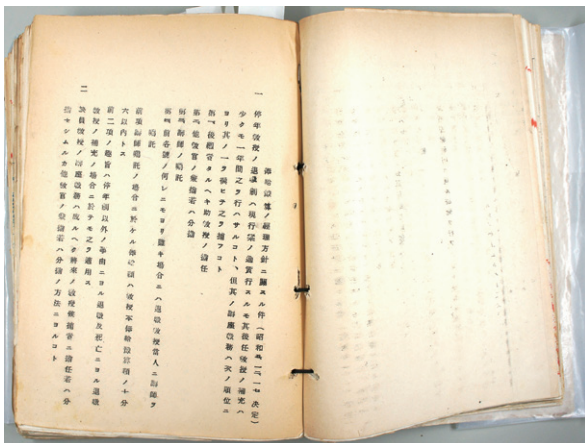
そうした過程を経て、私は今春、当館の歴史資料部門に着任した。これまでも文書館での資料整理には従事しアーカイブズ業務の一端には触れてきたが、今後は本格的にアーキビストとして働くこととなる。ようやく右と左くらいはわかるようになってきた段階にすぎず、まだ「東大文書館、いかにあるべきか」を語るにはおぼつかない。しかしこの短い期間であっても、利用者から運営側へと立場が変わったことで強く印象を受けたことがある。

それは、文書館に所蔵されている資料は人に

よって作られ、具体的な誰かの手を通じて文書館にやってきたという、それ自体はいたって当然の事実である。しかし恥ずかしながらこれまでの私は、自らの足で個人や組織のもとを訪ねて未公開資料を見せていただくという経験が少なく、すでに公的機関で保存・公開された資料を用いて研究を進める場合がほとんどだった。あるいは資料整理に携わる際も、機関への寄贈手続きが済み、それと結びついていった人間関係がいったん切れた後の資料に触れてきた。そこで向き合う資料は、「私たち」研究者にとって重要な「研究材料」「記録資料」だったのである。

しかし当館への着任以降、資料をご寄贈くださる方、あるいはそれを仲介してくださる方々と連絡を取り合うなかで、それぞれの資料が単なる「研究材料」「記録資料」ではなく、研究者の世界に限らないさまざまな人びとの記憶や思いが重層した歴史的所産であることを感じた。言葉を換えれば、資料には、客観的に重要とされる過去の事実を解明し証明する手段としての「学術的価値」や「歴史的価値」だけでなく、それに直接的に関わった人びとの主観や体験に由来し、それ自体が目的となるような価値が内在することを認識したのである。寄贈資料の収集・保存を担う歴史資料部門の仕事の魅力は、「学術的価値」「歴史的価値」はもちろんのことながら、寄贈者や関係者の方々のそうした主観的な価値をも肌で感じ、その継承に一役買うことができる点にもあるのではないかと考えた次第である。

アーカイブズは、資料の保存を通じて過去・現在・未来をつなぐことを使命とする。他方でこうして振り返ってみると、その活動は、利用者や寄贈者といった血の通った人びととの相互関係によって成り立ち、資料と人との結びつける役割をも担っていることが浮かび上がってくる。そうした課題も心に留めながら、当館がより良いアーカイブズとして人びとの間に根を張り枝を広げていけるよう、力を注いでいきたい。



1942年の京都帝国大学文学部教授会議事録に綴じられた、1930年の部局長会議の記録（京都大学大学文書館所蔵「教授会記録 昭和十七年」、識別番号03B00061）¹

1 立花孝裕「『教学刷新』と帝国大学」（『日本史研究』第736号、2023年）参照。

地震研究所100周年と文書館資料

地震研究所／地震火山史料連携研究機構 准教授 加納 靖之

2025年（令和7年）、地震研究所は100周年を迎える。1925年（大正14年）11月13日、勅令第311号により官制¹が公布されてから100年である。記念式典や講演会などさまざまな企画を予定しているが²、そのうちのひとつ、地震研究所1号館内の記念展示において文書館の資料を利用した。

1. 震災予防調査会の活動と大正関東地震： 1892年～1923年

1891年（明治24年）10月28日に発生した濃尾地震では、死者7,273人、建物全潰14万余という大きな被害が発生した。当時の政府にも大きな衝撃を与え、東京帝国大学理科大学教授であり貴族院議員でもあった菊池大麓は、帝国議会に対し、地震被害を最小限に食い止めるための研究機関の設置を建議する。その結果、1892年（明治25年）、震災予防調査会が発足する。

震災予防調査会の活動³の多くは、東京帝国大学の教官が中心になって行われたこともあり、震災予防調査会から帝国大学総長などに宛てた文書が文書館に保管されている。たとえば、「文部省往復 明治二十六年」に含まれる「震災予防調査会長ヨリ編年史料ノ内地震ニ関スル分謄写ノ件」（S0001/Mo103/0080）では、地震・火山噴火に特化した史料集の編纂のようすが伺える（写真1）。私の現在の主な研究テーマは、歴史資料に基づいて過去に発生した地震を調べることである。先輩方がつくられた史料集を多いに活用しているとこ

ろであり、この「謄写ノ件」によって収集されたものも地震の史料集に含まれている。

「文部省往復 明治二十八年」の「震災予防調査会ヨリ木造耐震家屋構造要領等調査ノ主旨送付」（S0001/Mo106/0079）は、前年に発生した庄内地震の被害調査に関するものである。この調査の成果が震災予防調査会報告3号に掲載されており、現在、京都大学防災研究所や山形大学と進めている共同研究でも参照している⁴。また、震災予防調査会は、帝国大学の土地を借用していくつかの施設を作った。「文部省往復 明治四十一年度」の「本學構内ニ震災豫防調査會小屋建設ノ件」（S0001/Mo131/0095）などがその様子を物語る。

1923年（大正12年）9月1日に大正関東地震が発生し、死者・行方不明者10万5千余、住家の全潰10万9千余などの大きな被害をもたらした。震災予防調査会では、多角的な調査・研究を実施し、震災予防調査会報告100号（甲乙丙丁戊・6巻）にまとめている。この地震による大きな被害を踏まえて、地震研究のあり方の見直しが図られ、地震研究所の設立へと動き出すことになる。大地震が起きるたびに地震研究のあり方が問われるのは、今も昔も変わらない。

2. 地震研究所の設立：1925年

冒頭に述べたとおり、1925年に地震研究所官制が公布される。最初の事務所は工学部船舶工学科付属建築物の一部（「バラック」）であった⁵。



写真1. 「震災予防調査会長ヨリ編年史料ノ内地震ニ関スル分謄写ノ件」（S0001/Mo103/0080）

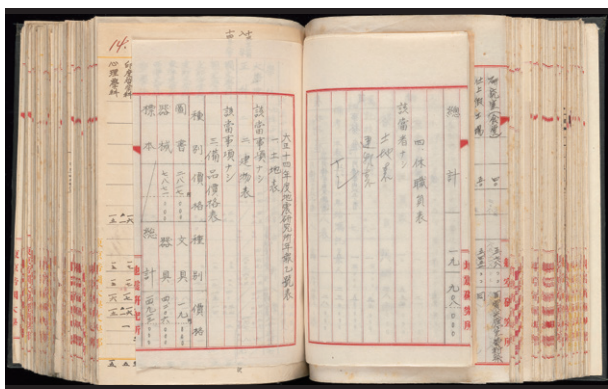


写真2. 「地震研究所大正十四年度年報報告ノ件」（S0001/Mo165/0014）

設立直後から発行されている「地震研究所彙報」⁶の第1号の「所報」には、所員の研究項目や「談話会」での発表タイトルが掲載されており、設立初年度の活動を伺い知ることができる。ちなみに、「彙報」は2024年度末に99号が出版され、「談話会」は2025年7月で1,049回を数えるなど、100年続く研究活動である。

「地震研究所大正十四年度年報報告ノ件」(S0001/Mo165/0014)には、設立初年度の地震研究所の概況、規定、設備、職員、研究事項がまとめられており、出張回数と人員、職員の人数と俸給、所有資産額の表もついている(写真2)。この資料からは「彙報」の記載よりもさらに具体的な運営状況を知ることができる。官制にも定めがあったように、地震研究所は所員を東京帝国大学や他の帝国大学の教授・助教授に限らない開かれた組織であることが特徴とされる。職員の表からもこのことがよくわかる。また、所有資産の表をみるとまだ独自の建物をもたず、概要でも「本所ニ於テハ研究上至急建築ヲ要スルモ敷地其他ノ関係上着手スルヲ得サリシヲ遺憾トス」と説明されている。また、備品価格表として、図書1,817円、文具19円、器械7,871円、器具4,206円の総計14,913円となっている。

「東京帝国大学一覧 従大正十五年至昭和二年」(F0004/A/01/07)の付録に1927年(昭和2年)時点の構内図があり、安田講堂の裏に建てられた地震研究所の(旧)本館の位置がわかる。この本館は所員であった内田祥三が設計したものである。内田は安田講堂など構内のほかの多くの建物も設計している。

3. 今村明恒の桃山地動観測所

当時の地震学の第一人者であり、地震研究所員でもあった今村明恒は、観測網の整備に情熱を注ぐ。今村が整備した観測所のひとつに、桃山地動観測所がある。南海トラフで発生する地震をターゲットとして、和歌山を中心に整備していた地震・地殻変動観測網の一角を担うものであり、桃山御料地内にあったということまでは知られていた⁷。私は前職で京都大学防災研究所に勤務していたこともあって、もうすこし詳しい場所が知りたくなり、ヒントを求めて文書館のデータベースを検索した。すると「〔東京帝国大学理学部附属

桃山地動観測所・東京帝国大学附属艇庫 五万分一地形図〕」、「〔東京大学理学部附属桃山地動観測所敷地建物図〕」という資料があることがわかった。現地を確認したところ、参道の形状などから位置は把握できたが、残念ながら観測所があったことを思わせる痕跡は発見できなかった。これまで知られていた観測点の座標(緯度、経度)が若干違っていることが判明した。

部局に引き継がれていない、あるいは、残っていない情報が文書館の保管資料としてみつきり、よく分かっていなかった事情が明らかになることがある。100年前の研究内容は、論文を読んだだけでは分からないことも多い。研究を取りまく環境や出来事など、当時の研究者には共有されていた情報が、論文には明記されておらず、いまに伝わっていないということが(少なくとも私の周囲では)しばしばある。過去の研究の背景を理解するには、文書館が保管する大学や部局の運営に関する資料も欠かせない。

桃山地動観測所の関連資料の閲覧にあたっては、寺島宏貴氏をはじめ文書館の方のお世話になった。デジタルアーカイブの整備により、目録の検索と相当数の資料画像の閲覧が手元でできるのはいへんありがたい。文書館における資料の収集・整理と、デジタルアーカイブの拡充が進み、それらを利用して、地震研究所および東京大学の埋もれている事実が発掘されるのを楽しみにしたい。

-
- 1 地震研究所官制、国立公文書館デジタルアーカイブ、<https://www.digital.archives.go.jp/img/1648111>
 - 2 東京大学地震研究所100周年記念サイト、<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/100th/>
 - 3 調査事業概略、震災予防調査会報告、第1号、1893年 <https://dl.ndl.go.jp/pid/831452>
 - 4 たとえば、石瀬素子・他、1894年庄内地震の被害記録のデジタルデータ化と被害分布に関する検討、歴史地震、40号、2025年
 - 5 大蔵省印刷局[編]、官報、1925年12月04日、国立国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/pid/2956134>
 - 6 地震研究所彙報、https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/search?search_type=2&q=4535
 - 7 岩田孝行・野口和子、和歌山地震観測所における機械式地震計の記象、東京大学地震研究所技術研究報告、71-82、2002年、<https://doi.org/10.15083/00032220>

業務日誌（抄） （2025年2月～2025年7月）

※（本）：於本郷本館、（柏）：於柏分館、（オ）：オンライン

2/6 元、アメリカ出張（～2/14）
2/10 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
2/14 ソウル大学記録館視察（柏）
2/19 環境整備チームによる書架清掃（柏）
2/20 先端科学技術研究センターより資料寄贈（F0284 大学関係記念品）
2/21 元、小澤、全史料協関東部会第326回定例研究会参加
2/25 第120回館員打合せ（柏）
2/26 元、三重県公文書審査会事前打合せ（柏）
2/27 森本、2024年度第2回 部局CERT責任者連絡協議会出席（オ）
書庫に害虫防除剤散布（本）
2/28 元、第4回三重県公文書等管理審査会出席（オ）
秋山、令和6年度第1回総合研究棟安全衛生管理専門委員会出席（柏）
3/3 元、スイス出張（～3/7）
3/4 資料燻蒸（柏。～3/28）
3/6 森本、RRI・ELSIの観点を組み込んだ研究倫理セミナーの取組報告会出席（オ）
3/11 秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
森本、自然科学系アーカイブズ研究会参加（～3/12）（オ）
3/12 農学部森林動物学研究室より資料追加寄贈（F0310 森林動物学研究室旧蔵資料）
3/13 特定歴史公文書等の劣化調査館内研究会（オ）
3/17 資料追加寄贈（F0324 1980年文学部卒業生（女性）関係資料）
3/18 佐々木敦士様より資料寄贈（F0330 佐々木正展関係資料）
3/19 マシュハド・レザー廟文書館長視察（本）
森本、150周年記念事業企画調整委員会企画部会3館合同展示 WG出席（オ）
3/21 週及一括移管予定工学部文書の調査（本）
3/25 次期DAシステム検討報告会（本）
第121回館員打合せ（本）
3/26 熊田亜紀子様より資料寄贈（LPレコード）
津田敦様より資料寄贈（F0284 大学関係記念品）
3/28 柏図書館2024年度企画展示「戦前の「帝大生」にせまる」終了
3/31 秋山淳子助教退任
書庫に害虫防除剤散布（本）
4/1 立花孝裕助教着任
4/7 佐々木敦士様より資料追加寄贈（F0330 佐々木正展関係資料）

4/14 森本、中曽根平和研究所研究会にて報告（オ）
4/21 森本、150周年記念事業企画調整委員会企画部会3館合同展示 WG出席（オ）
4/22 第122回館員打合せ（柏）
4/23 環境整備チームによる書架清掃（柏）
4/25 671室、エアコン内にカビを確認したため業者による洗浄（柏）
4/28 森本、内閣府公文書管理委員会出席（オ）
書庫に害虫防除剤散布（本）
4/30 南原和子様より資料寄贈（F0139 南原繁関係資料）
5/7 書庫に害虫防除剤散布（本）
5/9 森本、「高校生と大学生のための金曜特別講座」にて講義（オ）
5/12 立花、柏地区安全衛生教育講習会参加（オ）
森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
佐々木敦士様より資料追加寄贈（F0330 佐々木正展関係資料）
工学部モーター同好会OB会資料寄贈協議
5/13 週及一括移管工学部資料搬入（柏）
5/14 健康と医学の博物館展示「精神医学治療体制の確立を目指して」開始（本）
5/16 立花、柏地区一般公開担当者会議出席（オ）
5/20 書庫、空調稼働開始（ドライ、26℃）（本）
5/21 書庫、空調稼働開始（ドライ、25℃）（柏）
5/27 第123回館員打合せ（本）
5/30 書庫に害虫防除剤散布（本）
6/2 書庫、除湿機稼働開始（柏）
6/4 令和7年度第1回文書館運営委員会（オ）
6/9 柏図書館2025年度企画展示「千葉で始まった東京大学演習林の歴史」開始
6/13 立花、柏地区一般公開担当者会議出席（オ）
6/17 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
6/18 環境整備チームによる書架清掃（柏）
659、661、663室ドアブラシに害虫防除剤散布（柏）
6/19 東京大学アルバム編集会より資料追加寄贈（F0271 東京大学アルバム編集会関係資料・F0025 史料室アルバム）
6/24 第124回館員打合せ（柏）
6/27 書庫に害虫防除剤散布（本）
書庫（SC105、S110）ドアブラシ交換（本）
6/30 書庫に害虫防除剤散布（柏）
7/4 元、柏図書館企画展示ギャラリートーク（柏）
7/15 森本、立花、百五十年史編纂室会議陪席（オ）

7/17 元、三重県公文書等管理審査会事前打合せ（柏）
 7/18 立花、柏地区一般公開担当者会議出席（オ）
 科学の碑記念会館より資料寄贈（F0332 長岡半太郎関係資料）
 7/22 山田和子様より資料寄贈（F0333 神宮弘陽関係資料）
 7/23 森本、国文学研究資料館アーカイブズカレッジ出講
 元、国文学研究資料館アーカイブズカレッジ出講（オ）

7/25 元、国文学研究資料館アーカイブズカレッジ出講（オ）
 元、全史料協近畿部会第176回例会参加
 7/29 第125回館員打合せ（本）
 7/30 元、第11回部局セキュリティ担当者向け研修（オ）
 7/31 書庫に害虫防除剤散布（本）

資料の公開について (2025年2月～2025年7月)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等の資料群は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト（目録）、既存資料群へのアイテム追加は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます(<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>)。

※特定歴史公文書は2025年6月に分類体系を見直し、22分類に再編しました。詳細は当館デジタル・アーカイブの「資料概要」を参照ください。

特定歴史公文書等

全学事務

S0792 高速計算機委員会
 S0793 放射性物質管理・環境安全管理
 S0794 キャンパス問題・キャンパス活用

部局

S0795 附属図書館 大学紛争・大学改革関係

歴史資料等

総長・役員・教員資料

F0057 山内太郎関係資料
 F0018 阪口豊関係資料
 F0298 阿部武司関係資料

職員資料

F0285 松岡巖関係資料

学生資料

F0021 宇井純関係資料
 F0050 小橋一太関係資料
 F0061 今井光之助関係資料
 F0326 菊井維大関係資料
 F0094 教育学部学生自治会関係資料
 F0281 志摩（西沢）晴樹関係資料

その他

F0289 赤塚義英関係資料

今期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、東京大学に関する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

文書館Topics

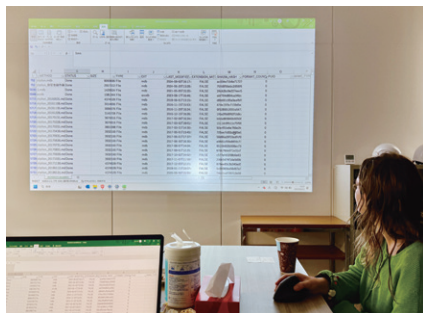
電子記録保存体制づくりに向けて意見交換を行いました

2025年4月23日、フランチェスカ・マッケンジー氏（Francesca Mackenzie）が当館柏分館を訪問されました。彼女は、筆者が2023年に英国・アイルランドアーカイブズと記録協会（The Archives and Records Association UK & Ireland）の年次大会で報告した時に知り合ったデジタルアーキビストで、ファイルフォーマット識別やデジタル保存ツールに関する豊富な実務経験を有しています。今回、彼女の私的な来日にあわせ、当館における電子記録保存の現状や課題について意見交換を行いました。

当日は、筆者の他、当館の森本准教授、小澤特任研究員に加え、立教大学共生社会研究センターの平野泉氏も参加され、デジタル記録の保存に関する活発な議論が行われました。マッケンジー氏は、ファイルフォーマット識別ツール「DROID（Digital Record Object Identification）」の操作を実演しながら、電子記録の長期保存において正確なフォーマット識別が果たす役割について解説してくださいました。

DROIDは、英国国立公文書館（The National Archives UK, TNA）が開発したオープンソースのソフトウェアで、ファイルの拡張子が欠けていても内部構造（バイト列）の分析によって正確なファイル形式を識別できます。識別結果はCSV形式で出力可能で、重複ファイルの検出や保存対象の選定にも応用されています。

このDROIDの中核となる識別情報（signature）は、PRONOMというオンラインの技術情報システムを通じて提供されています。PRONOMは、各ファイル形式の技術仕様や、それを読み書きできるソフトウェア製品に関する情報を網羅的に収録した公開レジストリで、定期的な更新によってDROIDの識別精度を支えています。



DROIDによって識別された電子ファイルの分析結果について説明するフランチェスカ・マッケンジー氏（2025年4月23日、当館柏分館にて）

現在、DROIDは1400種類を超えるファイル形式に対応しており、世界各国の文化遺産機関や行政機関で活用されているほか、電子記録の長期保存における技術的基盤としても国際的に高く評価されています。

本学においても、ここ数年で電子ファイルの移管が進みつつありますが、当館におけるデジタル長期保存に向けた本格的な体制整備の検討は、まだ始まったばかりです。今回の意見交換会は、先進的なツールの検討は、まだ始まったばかりです。今回の意見交換会は、先進的なツールと実務的な知見に触れる貴重な機会となりました。今後、当館における電子記録の安定的な移管と持続可能な保存体制の構築に向けて、今回得られた知見を活かしていきたいと考えています。

（元ナミ）

参考サイト：

DROID（<https://www.nationalarchives.gov.uk/information-management/manage-information/policy-process/digital-continuity/file-profiling-tool-droid/>, accessed：2025-07-25）

PRONOM（<https://www.nationalarchives.gov.uk/PRONOM/Default.aspx>, accessed：2025-07-25）

東京大学文書館ニュース 第75号
ISSN 0915-3284



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

発行日：2025年9月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

Eメール：daigakus.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

ウェブサイト：<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷所：株式会社 テンプリント

